

『過程の演習 新国語問題集』

10 菊池寛「入れ札」

「10」役人から追われている国定忠次は、意中の子分だけを連れて逃げようと考えたが、今まで苦労をともにして来たことを考えるとそのことが言い出せなかった。そこで忠次は、子分を選びすぐるために入れ札を提案し、子分たちも納得した。以下の文章を読んで、後の問に答えよ。(岡山大)

先刻からの経路を、一番厭な心で見えていたのは稲荷の九郎助だった。彼は年輩から云つても、忠次の身内では、第一の兄分でなければならなかった。が、忠次からも、子分からも、そのようには扱われていなかった。去年、大前田の一家と一寸した注一出入りのあつた時、彼は喧嘩場から、不覚にも大前田の身内の者に、引つ担がれた。それ以来、彼は多年培つて自分の声望がめつきり落ちたのを知った。自分から云えば、遥かに後輩の浅太郎や喜蔵に段々凌がれて来た事を、感じていた。そればかりでなく、十年前までは、兄弟同様に賭場から賭場を、一緒に漂浪して歩いた忠次までが、何時となく、自分を軽んじている事を知った。皆は表面こそ「阿兄！ 阿兄！」と立てているものの、心の裡では、自分を重んじていないことが、ありありと感ぜられた。

入れ札と云う声を聴いたとき、九郎助は悪いことになったなあと考えた。今まで、表面だけとはかくも保つて来た自分の位置が、露骨に崩されるのだと思つと、彼は厭気がした。十一人居る子分の中で自分に入れてくれそうな人間を考えてみた。が、それは弥助の他には思い当らなかった。弥助も九郎助と同様に、古い顔であつて、後輩の浅太郎や、喜蔵などが、グングン頭を擡げて来るのを、常から快からず思っているから、こうした場合には、きつと自分に入れてくれるだろうと思つた。が、弥助だけは自分に入れてくれるとしても、弥助の一枚だけで、三人の中に這入ることは考えられなかった。浅太郎には四枚入るだろうと思つた。喜蔵に三枚入るとして、十一枚の中、後へ四枚残る。その中、自分の一枚をのけると三枚残る。もし、その中、二枚が、自分に入れられていれば、三人の中に加わることは出来るかも知れないと思つた。が、弥助の他に、自分に入れてくれそうな人は、どう考えても当てがなかった。ひよつとしたら、並川の才助がとも思つた。あの男の若い時には、かなり世話を焼いてやった覚えがある。が、それは六、七年も前のことで、今では「浅阿兄、浅阿兄」と、浅にばかりくつ付いている。そう思うと、弥助の入れてくれる一枚の他には、今一枚を得る当ては、どうにもつかなかった。子分の中で年頭でもあり、一番兄分でもある自分が、入れ札に落ちることは――自分の信望が少しも無いことがまざまざと表れることは、もう既定の事実のように、九郎助には思われた。(1)不愉快な寂しい感じに堪えられなくなつて来た。

一本しか無い注二矢立の筆は、次から次へと廻つて来た。

「おい！ 阿兄！ 筆をやらあ」

ぼんやり考えていた九郎助の肩を、つつきながら横に居た弥助が、筆を渡してくれた。弥助は筆を渡すときに、九郎助の顔を見ながら、意味ありげに、ニヤリと笑つた。それは、たしかに好意のある微笑だった。「お前を入れたぜ」と云うような、意味を持った微笑であるように九郎助は思つた。そう思うと、九郎助は後のもう一枚が、どうしても欲しくなつた。後の一枚が、自分の生死の境、荣辱(名誉と恥辱)の境であるように思われた。忠次に付いて行つたところで、自分の身に、いい芽が出ようとは思われなかったが、入れ札に洩れて、年甲斐もなく置き捨てにされることがどうしても堪らなかつた。浅太郎や喜蔵の人望が、自分の上にあることが、マザマザと分かることが、どうしても堪らなかつた。

かれは、筆を持つてぼんやり考えた。

- 1/6 -

「おい！ 阿兄！ 早く廻してくんな！」

横に坐っている浅太郎が、彼に云つた。阿兄！ と云いながらも、語調だけは、目下を叱っているような口調だった。九郎助は、毎度のことながらむつとした。途端に、相手に対する烈しい競争心が――嫉妬がムラムラと彼の心に渦巻いた。

筆を持っている手が、少しブルブル顫えた。彼は、紙を身体で掩いかくすようにしながら、仮名で「くろすけ」と書いた。

書いてしまうと、彼はその小さい紙片をくるくると丸めて、真中に置いてある空になった注三割籠の蓋の中に入れた。が、入れた瞬間に、(2)苦い悔悟が胸の中に直ぐ起つた。

「博打は打つても、卑怯なことはするな。男らしくねえことはするな」

口癖のように、怒鳴る忠次の声が、耳のそばで、ガンガン鳴りひびくような気がした。彼は皆が自分の顔を、ジロジロ見ているような気がして、どうしても顔を「A」ことが出来なかった。

吉井の伝助は、無筆だったので、彼は仲よしの才助に、小声で耳打ちしながら、代筆を頼んだ。

皆が、札を入れてしまうと、忠次が、

「喜蔵！ お前読み上げてみねえ！」と言つた。

皆は、緊張のために、眼を輝かした。過半数のものは諦めていたが、それでも銘々、うぬぼれは持っていた。注四壺皿を見詰めるような目付きで、喜蔵の手許を睨んでいた。

「あさ、ああ浅太郎の事だな、浅太郎一枚！」

そう叫んで喜蔵は、一枚、札を別に置いた。

「浅太郎二枚！」彼は続いてそう叫んだ。

又、浅太郎が出たのである。浅太郎が、この二、三年忠次の信任を得て、影の形に付き従うように、忠次が彼を身辺から放さなかつたことは、子分の者が皆よく知っていた。(3)浅太郎の声がつづくと、忠次の浅黒い顔に、ニツと微笑が浮んだ。

「喜蔵が一枚！」

喜蔵は、自分の名が出たのを、嬉しそうに、ニコリと笑いながら叫んで、

「嘘じゃねえぞ！」と、付け足しながら、その紙を右の手で高く上げて差し示した。

「その次が又、喜蔵だ！」

喜蔵は得意げに、又紙札を高く差し上げた。

「嘉助が一枚！」

第三の名前が出た。忠次は、心の中で、私に選んでいる三人が、入れ札の表に現れて来るのが、嬉しかつた。子分達が自分の心持ちを、察していてくれるのが嬉しかつた。

「何だ！ くろすけ。九郎助だな。九郎助が一枚！」

喜蔵は、声高く叫んだ。九郎助は、顔から「B」ように思つた。生れて初めて感ずるような羞恥と、不安と、悔恨とで、胸の裡が掻きむしられるようだ。自分の手蹟を、喜蔵が見覚えては、いはいしないかと思うと、九郎助は立つても坐つても居られないような気持ちだった。が、喜蔵は九郎助の札には、こだわっていないかつた。

「浅が三枚だ！ その次は、喜蔵が三枚だ！」

喜蔵は大声に叫びつづけた。札が次々に読み上げられて、喜蔵の手にたつた一枚残つたとき、浅が四枚で、喜蔵が四枚だった。嘉助と九郎助とが、各自一枚ずつだった。

九郎助は、心の裡で懸命に弥助の札が出るのを待っていた。弥助の札が出ないことはないと思つていた。もう一枚さえ出れば、自分が、三人の中に入るのだと思つていた。

が、最後の札は、彼の切ない期待を裏切つて、嘉助に投ぜられた札だった。

- 2/6 -

「さあ！ みんな聞いてくれ！ 浅と喜蔵とが四枚だ。嘉助が二枚だ。九郎助が一枚だ。疑わしいと思う奴は、自分で調べて見るといいや」喜蔵は最後の決定を伝えながら、一座を見廻した。誰も調べて見ようとはしなかった。誰よりも先に、九郎助はホッと安心した。

忠次は自分の思い通りの人間に、札が落ちたのを見ると満足して、切り株から、立ち上った。

「じゃ、みんな腑に落ちたんだな。それじゃ、浅と喜蔵と嘉助とを連れて行こう。九郎助は、一枚入っているから連れて行きたいが、最初云った言葉を変改することは出来ねえから、勘弁しな。さあ、先刻からえろう手間を取った。じゃ、みんな金を分けて銘々に志すところへ行つてくれ」

子分の者は、忠次が出してあつたうちから、銘々に十二両ずつを分けて取った。

「じゃ、俺達は一足先に行くぜ」忠次は選まれた三人を、差し招くと、みんなに最後の会釈をしなから、頂上の方へぐんぐんと上りかけた。

「親分、御機嫌よう。御機嫌よう」

去って行く忠次の後から、子分達は口々に呼びかけた。

忠次は、振り向きながら、時々、被っている菅笠を取って振った。その長身の身体は、山の中腹を掩うている小松林の中に、暫くの間は見え隠れしていた。

取り残された子分達の顔には、それぞれ失望の影があつた。

「浅達が付いていりや、大した間違いはありやしねい！」

口々に同じようなことを云った。が、やつぱり、銘々自分が入れ札に洩れた淋しさを持っていた。が、忠次達の姿が見えなくなると、四、五人は諦めたように、草津の方へ落ちて行つた。

九郎助は、忠次と別れるとき、目礼したままじつと考えていた。落選した失望よりも、自分の浅ましさが、ヒシヒシ骨身に徹えた。札が、二、三人に蒐まつているところを見ると、みんな親分の為を計って、浅や喜蔵に入れたのだ。親分の心を汲んで、浅や喜蔵を選んだのだ。そう思うと、自分の名をかいいた卑しさが、愈々堪えられなかった。

朝の微風が吹いて来て、入れ札の紙が、熊笹を離れて、ひらひらと飛びそうになった。

「ああ、こんなものが残っていると、とんだ手がかりにならねえとも限らねえ」

そう云いながら、九郎助は立ち上つて散らばっている紙片を取り蒐めると、めちやめちやに引きちぎつて投げ捨てた。(4)九郎助の顔は、凄いほどに蒼かった。(菊池寛「入れ札」による)

注一 出入りⅡ喧嘩のこと。

注二 矢立Ⅱ江戸時代に使われた、携帯用の筆記具。

注三 割籠Ⅱ弁当箱。

注四 壺皿Ⅱ博打で、さいころを入れて伏せるのに用いる器。

問1 空欄A・Bに適切な語句を入れ、「顔」に関する慣用的な表現を完成させよ。

(その他の例) ※知らないのがあれば、印をつけて後から調べよう。

顔を窺う 顔を合わせる 顔が売れる 顔が揃う 顔が立つ 顔が潰れる 顔が広い
顔に泥を塗る 顔に紅葉を散らす 顔向けができない 顔を貸す 顔を作る
顔を出す 顔を立てる 顔を繋ぐ 顔を直す 顔を見せる 合わせる顔がない 浮かぬ顔
大きな顔 汗顔の至り 顔色無し 涼しい顔 何食わぬ顔 澄ました顔 知らぬ顔の半兵衛
顔に書いてある 顔に出る 顔を売る 顔を拵える 顔を潰す 顔を振る
顔を汚す 顔向けできない 顔色をうかがう 顔見世の二番目

問2 傍線部(1)について、なぜそのような気持ち(不愉快な寂しい感じ)になるのか、分かりやすく述べよ。「目安」60字

▼方針Ⅱ①不愉快な寂しい感じが湧いてくる過程を叙述、②不愉快な寂しい感じを的確なことはで

言いかえる。☆「心情の」なぜ↓過程と「どのような」

①は抜き出し、整理すればよい。②が問題。文中の語を使えばよいが…。

(解答プロセス)

「子分の中で年頭でもあり、一番兄分でもある自分が、入れ札に落ちることは――自分の信望が少しも無いことがまざまざと表れることは、もう既定の事実のように、九郎助には思われた」から。

← ①抜き出しと整理

子分の中で最年長の兄貴分である自分が、入れ札に落ちて、信望が少しもないことがまざまざと表れることは、間違いないことのように思われたから。

←

子分の中で最年長の兄貴分である自分が、入れ札に落ちて、信望が少しもないことがまざまざと表れることは、間違いないことのように思われ、()と感じられたから。

▼②心情の言い換え。「不愉快な寂しい感じ」という表現は、こういう場合だけに当てはまるものではない。けんかして家を飛び出した、といったような場合にも、こういうことばは当てはまるだろう。しかし、ここにあるのは、「重んじられたい」という気持ちが傷つけられるときのある感じである。けんかのとときは違う。ここにふさわしいことばを何か考えて当てはめたい。

文中の語に頼つてみよう。あるある！ 入れ札が始まってから。

「九郎助は後のもう一枚(名譽を保つための一枚)が、どうしても欲しくなった。後の一枚が、自分の生死の境、榮譽(名譽と恥辱)の境であるように思われた。」！

恥辱、屈辱、重んじられない悔しき、といったことばが浮かんでくる。重んじられていないことはわかつている。しかし、それを暴露されるのが耐えられないのである。

(解答例)「最年長の兄貴分である自分が、入れ札に落ちて、信望のなさをみんなの前で見せつけられることは、屈辱的だと感じられたから。」61字

問3 傍線部(2)について、「苦い悔悟」とは何か、分かりやすく述べよ。「目安」90字

▼方針Ⅱ変化の過程を説明。結局、問2と同様、①過程(理由)、②言い換え(悔悟の内容)、を答えることになる。自分の名を投票したこと、が変化の大きなポイント。この(行為)が、(心情)の変化をもたらす。節目に■■■■■■■■■■印を入れてみた。こういった明示(見える化)は効果的。

(行為) 自分の名を投票。

「心」「相手に対する烈しい競争心――嫉妬」

↓

「苦い悔悟」

「心の声」「卑怯なことはするな」

「苦い悔悟」をもたらしたのは、「卑怯なことはするな」という忠次の口癖が心の中に蘇ったからだ。

①プロセスを整理する。

- ・浅太郎の目下にかけるような口調にむつとした
- ・相手に対する烈しい競争心や嫉妬が心に渦巻いた
- ・票を増やすため、自分の名を入れ札に書いた
- ・入れた瞬間に、苦い悔悟が湧き起こった
- ・卑怯なことはするなという忠次の声が心に浮かんできたことによって

←

文章にする。(素案)

「浅太郎の目下にかけるような口調にむつとしたため、相手に対する烈しい競争心や嫉妬が心に渦巻き、票を増やすため、自分の名を入れ札に書いたが、入れた瞬間に、卑怯なことはするなという忠次の声が心に浮かんだことによって苦い悔悟が湧き起こった。」

②言い換え(悔悟の内容)。★問いの焦点を見極める。問いは、「苦い悔悟」とは何か」だから、「悔悟」の語義も含めて、適切に言い換えなければならない。プロセスの整理に注力しすぎて、問いの本丸を忘れないように。

「悔悟」の「悔」は、後悔だろう。「悟」は、気づく、ということだ。何かに気づくことによって、後悔した。この形に、答案をはめていけばいい。

(解答例1)「浅太郎の目下にかけるような口調にむつとしたため、相手に対する烈しい競争心や嫉妬が心に渦巻き、票を増やすため、自分の名を入れ札に書いたが、入れた瞬間に、自分の行為が卑怯なことはするなという忠次の教えに反することに気づき、後悔の念が湧き起こった、ということ。」(127字)

←(刈り込み。「何に後悔しているか」に焦点を合わせる。)

(解答例2)「浅太郎に対する競争心や嫉妬が渦巻き、票を増やすため、自分の名を入れ札に書いたが、入れた瞬間、その行為が卑怯を憎む忠次の教えに反することに気づき、後悔の念が湧き起こった、ということ。」(90字)

▼(字数制限対策)もし、八〇字と制限されたらどこを切る？

↓答「浅太郎に対する競争心や嫉妬が渦巻き、」の部分。

理由「問いの焦点は、「何に後悔しているか」にあるので、何によってその行為が生まれたか、の部分は、カットできるから。」

問4 傍線部(3)について、この時の忠次の気持ちはどのようなものか、述べよ。[目安] 70字

▼心情の説明。①本文に説明がある場合、②直接的な説明がない場合、がある。今回は、①。

「忠次は、心の中で、私に選んでいる三人が、入れ札の表に現れて来るのが、嬉しかった。子分達が自分の心持ちを、察してしてくれるのが嬉しかった。」

だから、答えは、「嬉しい気持ち。」当然！ 短すぎない？ では、

「自分が選んでいる三人に票が入っていることや子分達が自分の心持ちを察してしてくれることに對しての嬉しい気持ち。」

とまとめたら、いいのでは？——もしこう書いた人があるとしたら、×です。なぜ？ だって、傍線部の時点では、まだ喜蔵や嘉助の名は出てきていないからだ。答えはこうなる。

(解答例)「自分が心の中で選んでいる三人のうち、浅太郎に続いて票が入ったことや子分達が自分の心持ちを察してしてくれることに對しての嬉しい気持ち。」(66字)

「子分達が自分の心持ちを察してしてくれる」は入っていない。「浅太郎が、この二、三年忠次の信任を得ていることを子分はよく知っていた」に続いて、忠次の微笑が続くからだ。ここは、語り手が忠次の心の中(＝浅太郎がいいな)を代弁して読者に提示しているところ。

★小説は、傍線部の箇所^①に注意。この問いのように、「その時点ではまだそうなっていない」ということを根拠に、誤りの選択肢が作られているのをよく見る。小説は、時間的に表現される芸術である。刻々と移っていく過程を注視せよ。

◎問5 傍線部(4)について、九郎助のどのような心情がうかがえるか、分かりやすく述べよ。[目安] 160字

▼☆終わってから攻めよ。スペースがいっぱいある。なんとなくいろいろ書いてあるのを並べとこか——というのは、得点にならない答案の作り方。終わり、押さえから考えよ！ このときの心情について書いてある直接の箇所が、終わりに来ないといけない。それは、

「落選した失望よりも、自分の浅ましさが、ヒシヒシ骨身に徹えた。札が、二、三人に菟まつているところを見ると、みんな親分の為を計って、浅や喜蔵に入れたのだ。親分の心を汲んで、浅や喜蔵を選んだのだ。そう思うと、自分の名をかけた卑しさが、愈々堪えられなかった。」

押さえの鍵は、浅ましさを卑しさ。「自分の浅ましさを卑しさに耐えられないような気持ち。」どんな点が浅ましき卑しいのか？と自問する。

「みんなは、親分のためを思い、親分の心にくんで投票した。一方、自分は、自分の嫉妬やプライドのために、自分の名を入れるという卑怯な行為をした。」☆対比で書ける。

(答案例1)「他の子分たちは、親分のためを思い、親分の心にくんで投票した。一方、自分は、自分の嫉妬やプライドのために、自分の名を入れるという卑怯な行為をした。九郎助は、そんな自分の浅ましさを卑しさに耐えられないような気持ちを感じている。」(110字)

これでも合格点だが、一六〇字が目安なら少し足りない。何が足りないか。この答案は基本的に、問3の「自分の卑怯な行為への後悔」と同じである。しかし、問3の部分とこの違いは何か。投票結果が明らかになったことだ。ここまでで、彼を襲った厳しい心情がすべて集中して彼を痛めつけ、この血の気のない「凄いほど蒼い」顔を生んでいる。答案例1は「落選した失望」を無視しているが、入れるとしたら、これだ。彼には、結局、彼自身以外誰も票を入れなかった。信望のなさ、完璧にさらされてしまったのである。

(解答例2)「結局誰も自分の名を書いてくれず、信望のなさを突きつけられた。また、他の子分たちは、親分のためを思い、親分の心にくんで投票したのに、自分は、自分の嫉妬やプライドのために、自分の名を入れるという卑怯な行為をした。九郎助は、そんな自分の寂しさや卑しさに耐えられないような気持ちを感じている。」(142字)

【問題集の解答例】

問1 AⅡ上げる BⅡ火が出る

問2 九郎助は、最年長の兄分であり忠次の第一の子分である自分が入れ札に落ちて人望のなさが露呈するであろうことを屈辱的に思ったから。

問3 頭角を現しつつある浅太郎に対する競争心や嫉妬から体面を保つために自分の名前を入れ札に書いたが、それは卑怯を嫌う忠次の教えに背く行為であることに瞬時に気づいたために後悔しているということ。

問4 ひそかに選んでいる三人のうち最も信頼する浅太郎の名前が続くことに安堵し、また子分達が自分の気持ちを察してくれていることがわかり嬉しい気持ち。

問5 他の子分達は忠次の意を汲んで、入れ札に臨んだのに、九郎助は、自尊心を保つために卑怯なまねまですたのだが、結局自分には自分で書いた以外一枚も入らず、そして、他の子分達は、自分の名がなかったことを淋しく思うだけで、九郎助が選ばれなかったことさえ、気にかけていないことで、一層の人間性の卑小さや浅ましさを思い知らされている心情。